新しい農業の時代

財団法人　日本肥糧検定協会
理事長　藤沼善亮

世界の穀物生産は，今年も順調のようである。4年続きの豊作は間違いないらしい。穀物市場は記録的な安値に揺れている。10月中旬で1ブッシェル（約27kg）あたり大豆は4ドル強，トウモロコシは2ドル弱。それぞれ26年，12年ぶりの安値だという。来年に向けて，穀物の供給には心配なさそうである。輸入国日本は，当面安心である。

日本の人口は，まもなくピークを迎え，減少に転ずるという。高齢化は一段と進む。高齢化と人口の減少が同時に進めば，その社会の生産力は落ちるのが普通である。農業生産もその例外ではありえない。日本の食料生産は，今以上に不安定になるのだろうか？

日本の耕地面積は500万ヘクタールを割り，最も大きかった時期の80％にまで減っている。耕作放棄や不作付け面積が増え，裏作も減って耕地の利用率は，最盛期の60％以下である。一方では，日本人の供給熱量2640kcalに対して，摂取熱量は2000kcalという数字もある。食べられずに捨てられる食料が4分の1にもなる。これらの総計が，食料自給率40％という数字である。

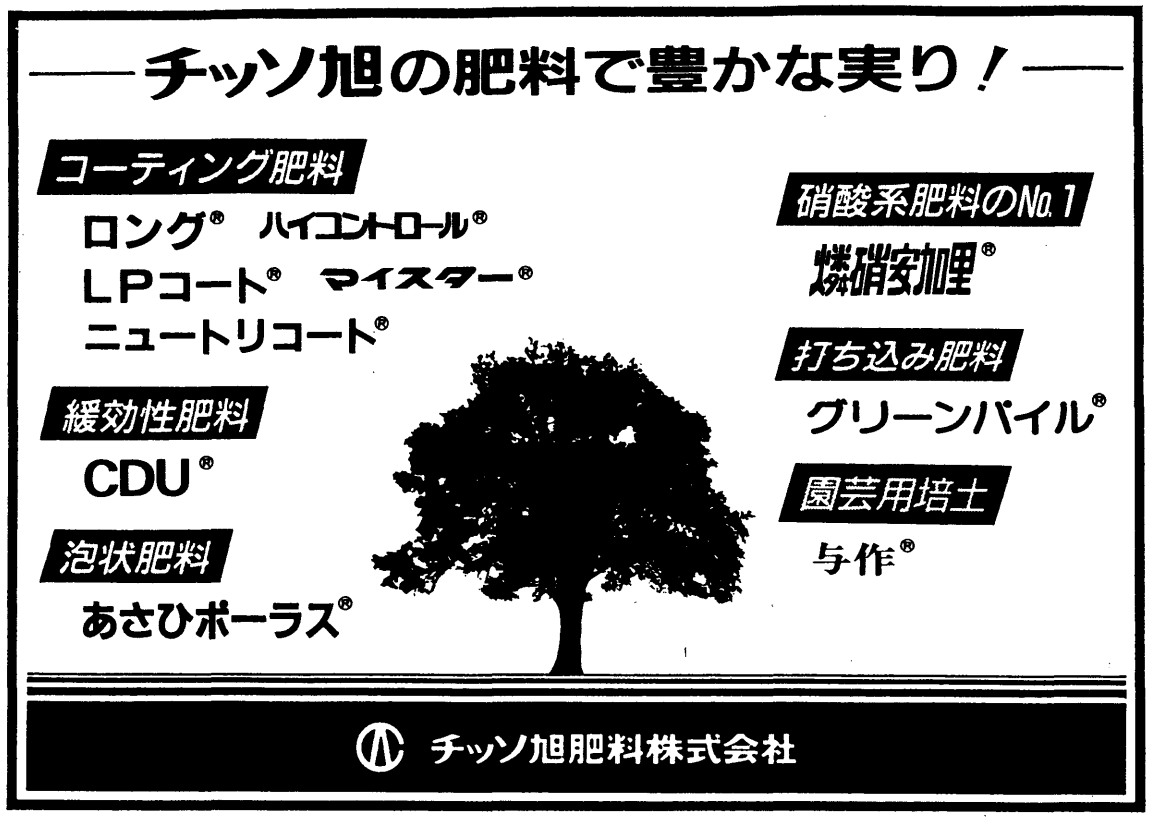
穀物の豊作が続いても，世界の穀物在庫は必ずしも増えていないようである。この傾向はこれからも強まるのかも知れない。世界の必要量の2か月分，という安全な備蓄量を確保していくのは，難しくなる。開発途上国では，人口の増加と食料生産基盤の悪化との不均衡が拡大している。世界一の人口大国である中国の経済発展は，穀物の需要を急増させている。中国は，次の世紀の世界の食料問題を不透明にする大きな要因になっている。お米は3大穀物の中で最も貿易量が少なく。自給的性格の強い穀物である。米の生産と，米を食べる人口の増加とのバランスは極めて不安定である。21世紀，食料がアジアの政情を不安定にするのかも知れない。

高度経済成長の時代以降，日本はアメリカ生れの消費文明に侵略されてしまった。大量消費は大量生産を生み，大量の廃棄物を生み出した。熱気にあふれた消費時代は終わったが，廃棄物の処理は大きな社会問題として残されている。膨大な量の有機廃棄物は，いま農地を脅かしている。改正された肥料取締法が，農地の安全保障の支えになってくれることを願っている。

街には食料があふれ，人々は幸せな飽食の時代を楽しんでいるが，そろそろ日本の食卓を支えている世界の事情が見えてくるにちがいない。今，日本農業は，あまり元気のでない状況に置かれているが，行き着くところまで行った所から出発するしかなさそうである。これまでの延長線上でない，新しい農業の展開も期待できる。

「国民の健康を預かる農業は，国が権限を持つ重要な分野である」と主張するフランス人。「食料の75％を自給するのは，外国には侵されない国民の権利である」と胸をはるドイツ人。日本は食料の自給に国民の関心がうすい珍しい先進国である。生産力の高い豊かな耕地を荒廃させながら，大量の食料を輸入し続ける日本という国を，他の先進国は理解できないに違いない。「特殊な国，日本」と評価される原因の一つかも知れない。

「食料の自給なくして国家の独立はない」。これはフランスのドゴール元大統領の言葉である。

日本人がこの言葉の意味を理解できるまでには，しばらくの時間がかかりそうだ。1993年程度の米の凶作が2～3年続く必要があるのかも知れない。

平穏な状態が続くのは幸せなことだが，食料増産の技術が風化しないうちに，日本の農業が再生して欲しい，と切に願っている一人である。(1999/11/29)